

もう一つ紹介することとする。伊達市立伊達小学校6年生の国語の授業である。この授業は泣けはしないが、感動ではなく感嘆に値するものであった。

教材は、小学校文学教材の最高峰である「海の命」である。その授業で、授業者が話したのは、計3回、時間にして2～3分ほどであった。あとの42分は、ずっと子どもたちが話していた。いや語っていたのである。一人の児童が、「命」について語り始める。すると、違う児童が、それを引き継いで語るのである。そうして、ずっと誰かが語っている。

まず、話す、しゃべるレベルではなく、「語る」というレベルの高さがすごいということである。一朝一夕には、子どもたちは、こうはならない。教材を深く読み取っていないと語れない。自分の思いがないと語ることはできない。次に、友達が語る内容をよく聞いて理解していないと、それを引き継いで語れない。一人一人の児童が語った時間は、さほど長くはない。そこから、言語活動が充実していたのかと言うこともできるであろう。しかし、子どもたちは、間違いなく「聞く」学習をしていたのである。それは、次の時間にでも、子どもたちに文章を書かせれば、すぐわかることである。

この授業者は、福島では数少ない授業の名人、達人の一人である。この先生が担当すると、いつも子どもたちが同じようになるのである。最初から、こんな高いレベルではない。この先生が育てていくのである。そして、確実に子どもたちに力をつけていく。

この授業は、研究公開の授業であった。教室中にたくさんの参観者がいた。私の県教育センターでの初仕事とでもいうべきものが、この授業への指導助言であった。私は、指導助言ではなく、今、求められている国語の授業について話をし、それを受けて、今日の授業のどんなところがすばらしいのか、どんな価値があるのか、子どもたちにはどんな力が身についているのか、授業の設計図である、授業者が作成した学習指導案の優れている点などについて解説をしていった。そうである。私の初指導助言は、実際は、滅多に見ることができない、すばらしい授業の解説だったのである。

「アクティブラーニング」とか「主体的・対話的で深い学び」、「言語活動の充実」など、この先生には関係のないことである。この先生の授業は、最初からこれらすべてをクリアしている。昔からすばらしい授業をする先生はたくさんいらっしゃった。そんな先生方に、これらのことは関係ない。間違いなく学びが保障されている。それも深い学びである。

若い先生方には、こんな先生の授業を見せたいものである。最初は、あまりにもすごすぎて、きっと価値がわからないであろうから解説が必要である。福島大学附属小・中学校の授業も、解説があると、もっと参観者にとって有意義なものになると以前から思っていた。若い先生方の多くは、「授業のモデル」がないという。目指すゴールのイメージがないということである。これは由々しきことである。これでは頑張りようがないではないか。五里霧中、暗中模索の状態となってしまう。

若い先生方には、南会津中学校と伊達小学校の両方の授業を見せたいと思う。それも解説付きで。私は、昔、まだ若い頃に、福島大学附属中学校の国語の授業を参観し、「これが中学校の国語の授業か」と自分のモデル、目指すゴールにしたものである。それは「夕鶴」の授業であった。今でも授業の様子を覚えている。生徒がどんどん発言し、先生はコーディネートしていく。板書は、構造的というよりは絵画的な素敵な板書であった。生徒の思考がどんどん深くなっていくのがわかった。教室中に、「読み取っている」「考えている」という空気が充満していたのである。

もう一度、あんな授業を見てみたいと思う。「海の命」の授業者であった授業の達人は、現在、私の妻と机を並べて仕事をしているというから、これまた不思議な縁である。